

2021-2022

NEW TRADITIONAL PAPER



福祉と伝統工芸のものづくりの可能性

NEW TRADITIONAL PAPER

2021-2022

福祉と伝統工芸とともに、
これからのものづくりを考える

福祉×伝統工芸の可能性に着目し、新しいものづくりのあり方を模索していくプロジェクト「NEW TRADITIONAL（以下、ニュートラ）」。「本誌はその取り組みのなかで培われた思考や言葉、イメージを発信するメディアです。

各地で活動が続けてきたニュートラも3年目を迎えました。工芸や産業の現場への訪問や、ディレクターを招き、個人のまなざしからニュートラを見出す展覧会の実施。つくり手や伝え手、クリエイター、研究者との意見交換など、調査・実践の過程では、たくさんの発見が得られました。

私たちのゴールは、ものづくりについて考え、人・もの・地域の循環を豊かにしていくことだと実感しています。素材・工法を柔軟な発想で追求するつくり手との出会いによって、伝統工芸という言葉の新たなとらえ方を見出すことができました。また、ものづくりを通して福祉を地域にひらく試みは、私たち自身の活動の意味をあらためて考えるきっかけを与えてくれました。

次に私たちに必要なのは、まだ出会えていない人たちとつながること。そして、これからも続く伝統となる、実践と実験が続けられる機会や場所を自分たちの手でつくることだと考えています。

今後も対話と学びを通して、豊かな循環を生み出す営みとそのあり方について、みなさんとともに探求していきたいと思います。



人と地域をつなぐものづくりから、
NEW TRADITIONALの未来を考える

photo: Naosumi Kurogasa

土地に根づくものづくりの現在を探り、伝統工芸の技術や素材、歴史・文化について学ぶため、2021年7月から2022年2月にかけて、スタディツアーとワークショップを実施。案内人や講師とともに、土地固有の素材やものをつくる仕組みに触れるなかで感じ、考えたことを一般財団法人たんぽぽの家・岡部太郎が振り返っていく。

森田一弥さんとの土壁巡り
(京都府京都市)

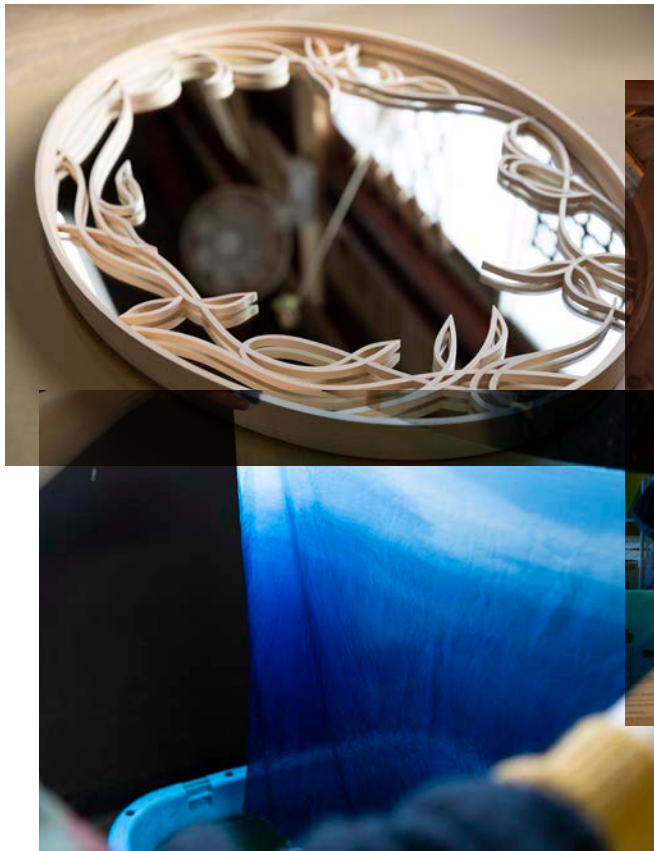
01

3年にわたり各地の伝統のものづくりや素材、福祉の現場を訪ねてきた。2年目となる2020年度、リサーチツアーに赴いた常滑のまさに“滑らか”な土の上で、本当に滑って転びかけたことが、いまでも身体の記憶として残っている。今年度は、平城京の土を使って布を染め、紙を漉く創作ワークショップも実施。子どもや障害のある人とともに、土に触れることを通して、歴史と自分自身が直結する瞬間を体感した。人がものをつくり、素材を加工して何かにしていくという原始的な行為を、肌で感じることができた機会だった。

また、土壁巡りも印象に残っている。建築家の森田一弥さんと大徳寺敷地内のさまざまな壁を見た。鉄を加えることによって浮かぶ点々を闇のなかの蛍に例えた「蛍壁」、あえて土のつなぎ材料である藁を壁に浮かべる粋。茶の湯の思想に重なる素朴さと美の調和から、民衆の生活が階級を越えてリンクしている様子を見ることができた。

茶室の外には土壁が連なる。森田さんは、お寺や家など、複雑な構造に関する建築は資金や職人の専門性、あるいは高度な道具が必要だが、土塀や土蔵は民衆がつくっていたのではないかと言う。手弁当で寄り集まって、地域のシンボルとなる寺や建物に関わる。つくっている壁は、内と外を隔てるものだが、実は壁づくりに関わることで、wall(壁)はbridge(橋)の機能も果たしたのではないか。土は扱いやすい。特殊な道具が要らず、人と時間さえあればものをつくることができる。そして、つくることに参加すれば、直すこともできる。土という素材が人をつなぎ、一緒につくったものは、結果として大切にされ、残り続けていく。

何かをつくるときに、何に価値を置くか。土壁づくりで一番かかったコストは「時間」だ。自然の力も利用しながら時間をかけたからこそ出来上がった。人が時間をかけてものをつくることは、まさに福祉の得意分野と言える。みんなでゆっくりとつくること。この時代において、ものづくりの意味をあらためて考えるヒントになるだろう。

高橋利明さんとのものづくりスタディツアー
(徳島県徳島市、上勝町、美馬市)

02

12月末、「伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー」(助成：日本財団)で、2日をかけて徳島県内を巡った。案内人の高橋利明さんは建築家として活動するかたわら、「ーみんなの複合文化市庭ーうだつ上がる」という施設を運営したり、地域の多様なものづくり、文化活動に関わったりしている。大阪出身、とにかくしゃべるのが大好きで、移動の車中は雑多な話で盛り上がった。

ツアーの最初に訪れた富永ジョイナーでは、4代目指物師の富永啓司さんから、手がけた作品を見せていただいた。流れるような曲線を描く木枠の姿見や、釘目のない組み木細工などを目にするだけで、参加者からは感嘆の声が上がる。聞くと、もともと船大工だった祖先が、戦争中、水に強い弾薬箱などをつくった歴史を経て、指物の生業ははじまったという。かつて全国屈指の建具産地だった徳島県。阿波の指物師を標榜する富永さんに、ものづくりへのプライドを感じた。もの自体の魅力ではなく、人の心が動くこと、想いが大事だと語る姿もとても印象深かった。

また、ものをつくる現場にとどまらず、ものを捨てる現場にも足を運んだ。ゼロ・ウェストセンターでは、まちの人たちがゴミを持ち込み、可能な限り分別できる仕組みを生み出し運用している。つくる、使うことの先にある、ものの行き先をイメージすることが大切なのだ実感させられた。

阿波指物、阿波紙、阿波藍と、地域のものづくりの現場を訪ねながら、歴史のなかで残ってきたものは、素材や工法、それによる産物だけでなく、人の想いだということを感じた。コロナ禍だが、徳島

の夜はどこにもぎわっていた。まだ続くであろう先行き不安な生活のなか、地元でもものづくりに関わる人たちの力強い言葉を胸に、これからさまざまな人や地域とつながっていきたいと思った。

旅を終えて

プロジェクトを進めると同時に、各地の障害のある人や家族、支援する福祉施設の職員と交流する機会も少しずつ増え、私たちは福祉と暮らし、仕事の可能性を広げるすべを探り続けてきた。私自身、障害のある人のアート活動、表現活動の支援に長年携わってきた。そして現在は、障害のある人の創造性を仕事につなげたり、地域の人たちの接点をつくり、居場所や交流の場所づくりの実験・実践を続けたりしている。

このプロジェクトに関わるなかで感じていることは、ものづくりは人間の根源的な行為であるとともに、さまざまな人とのつながりを生むということ。収入を得て生活を安定させるだけでなく、技術や専門性を持ち、社会のなかでの役割を実感することができる。私たちがイメージする福祉は、障害者福祉、高齢者福祉といったカテゴライズされたサービスではなく、生きる上で必要なつながりや支え合いのような、もっと大きな意味を指すのではないかとスタッフのひとりが言った。その実現のためには、個人の才能や技術を生かすだけでなく、人が集い、個々が実感をもって創造ができる場所、それぞれが尊厳をもって関わり合える場所が必要だ。ものづくりは人、もの、地域をつなげる。足下から未来まで、見えないブリッジをかけながら、これからもこの旅は続いていくのだろう。

過去も未来も、 美しいものが 好きなんです

インタビュー：川崎富美

2022年1月、鳥取市内の2会場にて、NEW TRADITIONAL 展 in 鳥取「和紙という銀河から、届く光」を開催。展覧会のディレクションは、デザイナーの川崎富美が担当した。川崎は、東京で(株)良品計画のインハウスデザイナーとして商品企画に携わった後、2017年より地元・鳥取へ移住。現在、手仕事や民藝のリサーチ、福祉施設・アートスペースからふるとの協働、商業施設のディレクション、ワークショップなど幅広く手がけている。本展を振り返りながら、川崎が考える、もの、ものづくりについて話を聞いた。

photo: Kazutoshi Fujita

収録：2022年1月27日（木）
場所：Am's ギャラリースペース（鳥取）

気持ちのいい仕事をする

— 本展では、因州和紙を素材として選ばれていましたね。どうして和紙だったんでしょうか？

2014年、鳥取県東部で初代から86年間、「狸々面」「青の鼻たれ面」「ぬけ面」など、なんとも言えない魅力をもつ張り子を手がけていた柳屋さんが引退されることになったんですね。それで、その後、私も鳥取に引っ越ししてきて、これからどんな素材を扱おうかと悩んで。やきものや木工、布などにも惹かれたんですが、設備・機材が必要になりますよね。そして、やきもの＝石をつくるようなものだから、つくったものがずっと残ってしまう。でも紙は軽いし、かさばらない。水に溶けば素材に戻せるのも魅力的だなと思って。平面だけでなく、張り子など立体をつくることもできる。だから、私がこの場所で生きて、ものづくりに携わっていくなら、紙という素材を扱いたいと考えようになりました。

— 想定外の理由で驚きました(笑)。

張り子の場合、いらなくなったら潰せばいいし、購入した人も可燃物として処分できる。捨てるのが難しい日用品も多いなか、私がつくるものはそれくらい存在感がちょうどいいと思うんですよ。

あと、張り子って、役に立たないでしょ？ ずっと工業製品をデザインしてきて、人の役に立つ道具は世の中に充分あるから、もうつくりたくないなと思って(笑)。張り子って、「なんかかわいいな」「なんとなく、ありがたい」とか、必要性がなくても欲しくなっちゃう感覚がありますよね。

— なぜか惹かれてしまう感覚、わかります。

最近、そういう類のものに惹かれますね。柳屋さんが引退すると知って、ご健在のうちにその技術を継ぎたいと思い、ここ数年、柳屋さんに張り子づくりを習っています。柳屋さんは、主に明治・大正期の古い和紙を使って張り子をつくっていて、お師匠さんは「昔の和紙は繊維が長くて、すごくきれいに仕上がる」と教えてくれました。材料がすべて国産で、質がいいんです。張り子もさまざまな作り方があるのですが、私は、なるべく先代に近い手法でつくりたいので、古道具屋さんに古い和紙を調達して、布糊や膠、泥絵の具、胡粉を使っていますね。もちろん、手軽に入手できる素材で代用したり、ポスターカラーのようなもので色をつ

けることもできるんですけどね。

— 先代の方法にこだわるのは、なぜでしょう？

私の場合、目的が「張り子をつくること」じゃなくて、「気持ちのいい仕事をする」ことなので。布糊って、紙に塗るとき、とにかく手触りがめっちゃ気持ちいいんですよ。だから、つくり手である自分のための選択でもある。そういう考えが前提にあるので、今回展示のお話をいただいたときも、私が目指している「気持ちのいい仕事」をほかの人にも味わってもらえたらいいなと思ったんです。

それが似合うかどうか

— 福祉施設・アートスペースからふるとの協働は、どのようなきっかけで実現したのでしょうか？

鳥取で開業した2018年、あいサポート・アートセンターが主催する「福祉をかえる『アート化』

セミナー」で名刺交換をしたのが最初です。翌年、所属アーティストの仕事づくりを目的に「からふるてぬぐい」をつくりたいと、お仕事の相談をいただきました。今回の展示では、型づくりも含め、和紙をつくる工程の大半をからふるさんをお願いしたんです。からふるの



photo: Kazutoshi Fujita

アーティストの作品をシルクスクリーンの版にし、アーティスト自身が自由にプリントした「からふるてぬぐい」（「和紙という銀河から、届く光」展より）

副理事長・伊奈真弓さんに素材をお渡しし、そこから各アーティストへ制作を依頼してくれて。伊奈さんをとっても信頼しているので、私の仕事は仕上がってきた作品に対して「もう少し、こうしてみましようか？」と提案するくらい。なので、今回の展示作品は、すべてからふるさんの仕事！

— 難しかったことはありませんでしたか？

つくり方が苦手だと思う方がいたり、私の試作とは違う結果になったり、うまくいかないこともありましたね。最初は無理かも……と思ったけれど、伊奈さんや因州和紙を手がける中原商店・中原寛治さんの意見を聞いて、少しずつ改善していくことができました。アーティストのみなさんの手つきを観察して、「これは苦手そうだから、この作業をお願いしよう」「こういう作業は難しいけど、こうしたらできるかも」と伊奈さんとも現場で相談しながら制作を進めていきました。

— 和紙という素材も、からふるさんとのやりとりのなかからハマリそうなものを選んだんですか？

それもあります。私自身は和紙の手触りのよさや美しさを知っていたけれど、そもそも高価なもので、一般的には触れる機会が少ない素材なんですよ。でも、私は作品をつくる際、素材や画材の選び方がすごく大事だと考えていて。アートを見慣れていない人にも作品のよさをわかってもらうために、それなりの格や質が必要なんですね。だから、この機会に高価な紙を使ってもらい、アーティスト自身にも「和紙って、いいな」と感じてほしかった。素材に触れて「やっぱりいいよね」って当たり前に感じられる機会をつくりたい。そんな気持ちがありました。

— “いい”には、感覚的な気持ちよさ、動機の清らかさ、トレサビリティも含まれますよね。

和紙屋さんが、原材料から育てて、和紙を生み出す。さらに、その丁寧につくられた和紙が、アーティストの創作へとつながっていくという“いい”もあります。支持体となるキャンバス、作品を飾る額も、それぞれの職人が誇りをもって、絵を生かすためにつくったものを合わせると、“いい”作用が起こる。私は、どんなことでも「似合うかどうか」を大切にしています。部屋のディスプレイを考えるときにも、何人家族で、どういう人が住んでいるかをイメージする。それと同じように、アーティストや作品に似合う画材や額を選び、一番の展示方法で作品を見せてあげたいと思うんですよ。

— 今回では、どんなところに現れていますか？

従来の因州和紙の展示だと、和紙は平面であることを前提にペイントされることが多いんですね。だけど、私は、和紙は薄っぺらいけれど、立体物ととらえて、少し違う見え方を考えました。展覧会名に「銀河」とつけたのも、紙という馴染みのある素材だけど、想像する以上の奥行きがあるから。観る人に、うんと心を広げて向き合ってもらいたくて。また、1,400年以上前に日本へ伝来した和紙が、いまここにあるという時間軸を、遠い銀河から時間をかけて届く光になぞらえて、「四次元」の視点で見てもらえたら嬉しいなと思います。

いまの感覚にならう

— さまざまな「ものづくり」に携わるなかで、どんなことが原動力になっていますか？

私に関わる「ものづくり」は、工業製品、福祉施設との協働、郷土玩具の収集やリサーチ、民藝のつくり手への取材など多岐にわたります。一見バラバラに見えるかもしれませんが、すべて「人の営みって面白いな」という気持ちが根っこにある。ものづくりって、人々が毎日の暮らしのなかで積み重ねてきた、文化の蓄積なんですね。それが、民藝の器になることもあれば、障害のある人のアートになることもある。そのアウトプットの違いを比較しながら、楽しんでいますね。

— 前職での経験が、そうした川崎さんの視点を養っているのでしょうか。

そうかもしれません。良品計画に在籍していた後半は、永く使われてきた日用品を世界中から探し出し、現代の生活に合わせて少し改良する「FOUND MUJI」という企画を担当していました。先進国・発展途上国を問わず、ものづくりの現場に入り込み、プリミティブなものから超大量生産のものまで、幅広く見てきました。それぞれを比較しながら、自分が手がけたものが店頭に並んだ後、どうなっていくかを想像するような仕事で、そのとき培った視点は、いまでも私のなかにありますね。

— 過去から脈々と続く営みを振り返りながら、現代の暮らしに合ったもののつくり方・あり方を考えていくんですね。

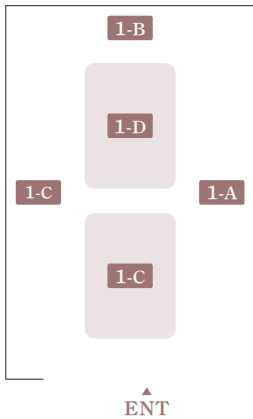
ものって、いまここにあるだけではなく、過去も未来も携えている、と思うんですね。だから、つくる人は、どんな考え・想いでつくるのか、この素材がどこから来ているのか、どうやって朽ちていくのか、考えないといけない。過去も未来も美しいものが好きなんです、私。でも、ものをつくる以上、絶対に「進化」は必要だと考えているんですね。だけど、この「進化」は、最新のテクノロジーや新素材という意味ではなく、「いまの感覚にならう」ということ。物質にまみれる時代を経て、私たちは人間の本質・身体性・感性に目を向けつつあると感じています。「心地よい」など、言語化・数値化しにくい感覚と向き合える時代になってきたようにも思うんですね。 **T**



かわさき・ふみ
プロダクトデザイナー。1979年鳥取市生まれ。岡山県立大学デザイン学部卒業。2007～2017年、株式会社良品計画にて無印良品の商品企画・デザイン、Found MUJI・福缶企画などを担当。2017年末、Uターンし開業。アートスペースからふるの商品デザイン、鳥取民藝美術館のビジュアルデザイン、Am'sの店舗デザインなどを手がける。鳥取大学非常勤講師。



“My New Traditional Collection” selected by Fumi Kawasaki
古材と新材の仕口 令和建設／松
photo: Kazutoshi Fujita

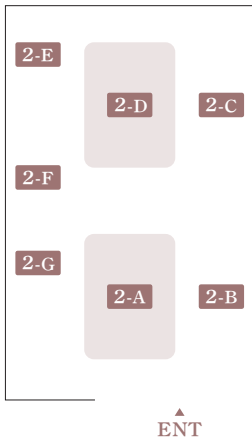


会場 1 マップ／アートスペースからふる



和紙の素材の可能性に助けられた。普段はドッキングという画法を用いて、平らな紙の上に絵の具を置いて絵を描いていた山本康介さん。今回、自分で素材を積み重ねることで、繊維の隆起などそのまま作品の土台になるというのは新しい発想でした。作業日はとても寒い大雪の日に、屋上で描く予定が、急遽ギャラリーに大きなプールを設けることに。康介さんに「好きなように紙料を撒いていいですよ」と伝えと、最初はおそろおそろだったのが、どんどん大胆になっていきました。素材は素直に楽しんでいるのが、私たちの想像を超えたものをかたちづくります。(伊奈真弓/アートスペースかふる)

前田龍一さんが描くコミカルな動物の絵がモチーフとなった和紙のオブジェ。自由な形に楽しく簡単にしてくれる工程を含め、アートスペースからふると川崎、中原商店が共同制作。



会場2マップ／Am's

2-B



障子紙にガリ版印刷と糊ペンで絵を施した作品(図画：和弘、岸本優希、ハルカ、杉山将大、キャメル村山、描画：岸本優希)。印刷／描かれた線は光を透過し、そこに画が表れる。光源の位置や描く面によって作品も表情を変える。

会場1: ギャラリー からふる (鳥取市元町 101 アート
スペースからふる 2 階)

日 時: 2022 年 1 月 21 日 (金) ~ 29 日 (土)

会場2: Am's ギャラリー (鳥取市行徳 1-155 Am's 店内)

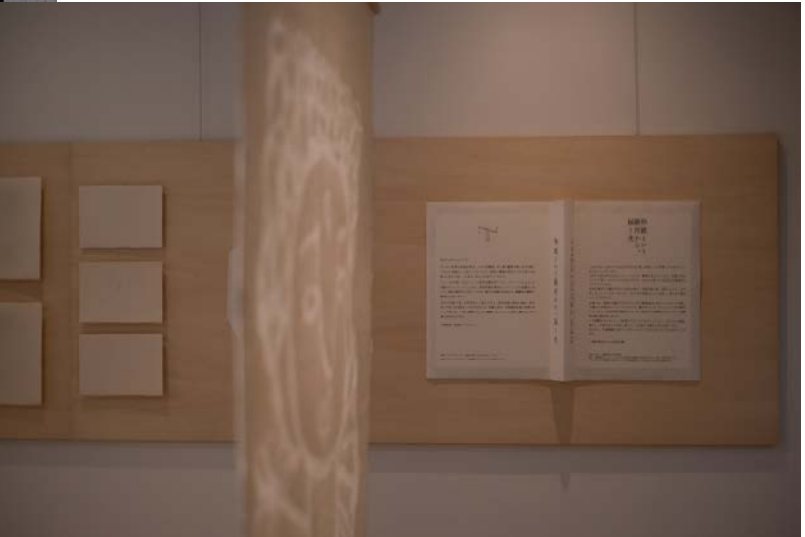
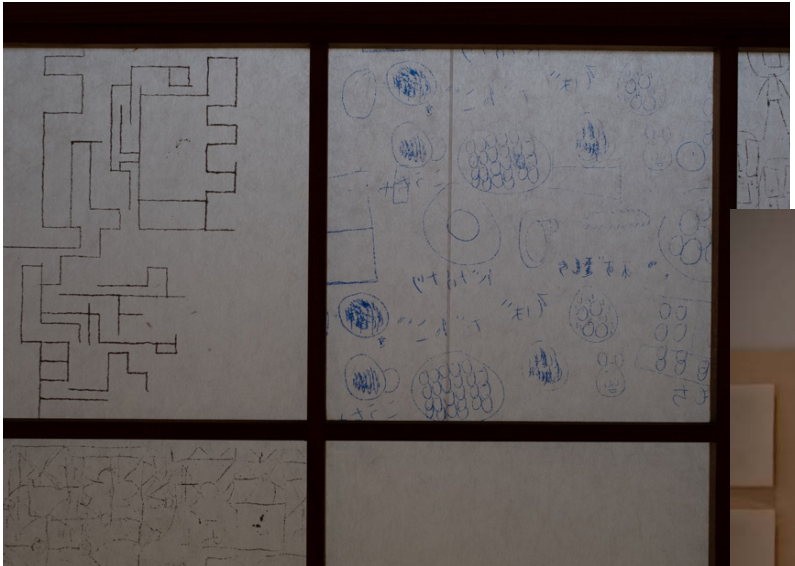
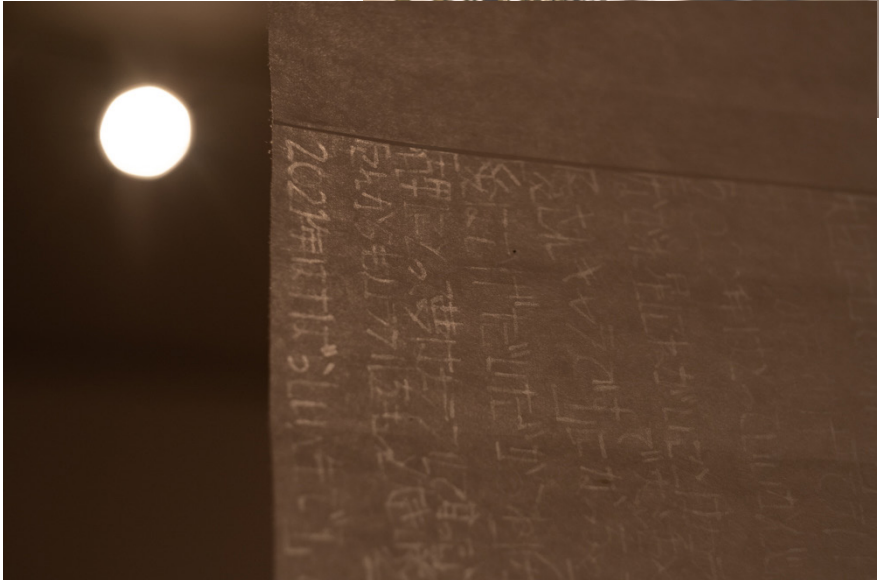
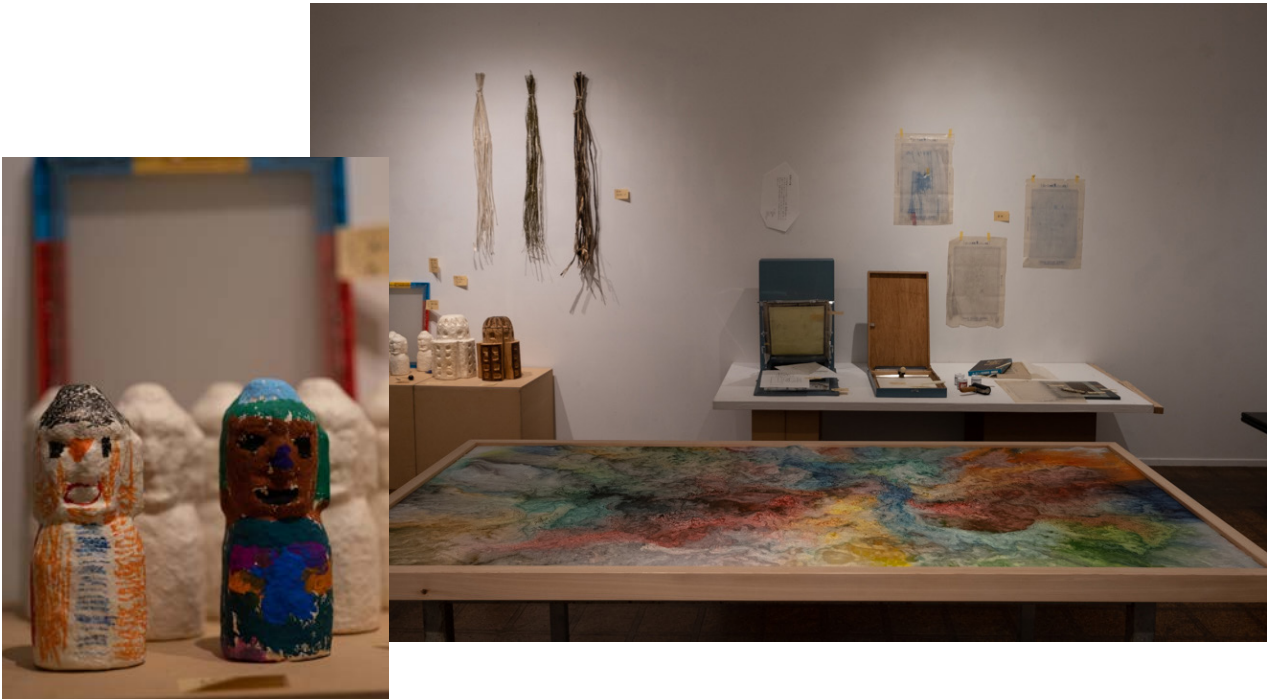
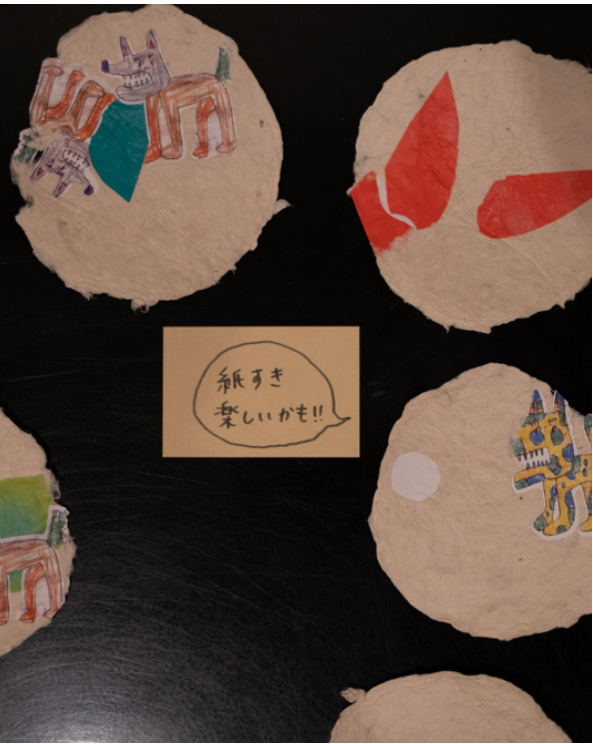
日 時: 2022 年 1 月 21 日 (金) ~ 30 日 (日)

主 催: 文化庁、一般財団法人たんぽぽの家
協 力: 一般社団法人 アートスペースからふる、
株式会社 中原商店、株式会社 torinoko、工作社、
合同会社 僕ら、Am's

令和 3 年度 文化庁委託事業「障害者等による文化
芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の
推進を含む)」

Installation View

photo: Kazutoshi Fujita



Document

ニュートラ日誌

2021-2022

ものをつくる・伝える・広げる多種多様な担い手たちと
出会い、そのなかで見てきたこと、語られた言葉を、
たんぽぽの家のスタッフが記録していく。

2021. 7.30 (金)

一般社団法人暮らしランプ・なかの邸訪問／京都

さまざまな活動から学び、
体験することでわかること



この日は京都・長岡京市にある「なかの邸」へ。江戸末期に建てられた登録有形文化財を活用し、障害のある人たちがいきいきと働ける場を運営されています。2019年に、自慢の料理とお酒で夜の食事を楽しめる場所としてオープン。障害のある人が夜間に働ける場所も珍しいですが、2021年からは新型コロナウィルスの影響を受け、新たな業態としてランチの提供もはじめました。また、本格的なコーヒー焙煎も行い、障害のある人とともに、プライドをもって質の高い商品を展開。日中の空間や庭も素晴らしく、竹垣や内装など、随所に手仕事への敬意とこだわりが感じられます。長い時間をかけ、人の手で積み重ねられた仕事のなかにいる贅沢を体感しました。(岡部太郎)

10.1 (金)

実例づくり(お蚕さんプロジェクト)／奈良

『OKAIKOSAN
お蚕さんと過ごす1年間』の発行

「お蚕さん、育ててみいひん？」という染織家の寺川真弓さんからの投げかけからはじまったプロジェクト。メンバーと一緒に世話をし、お蚕さんや桑について学び、養蚕・絹の文化や歴史などに触れてきたこの体験を伝えたい。でも、ひと言で表すことは難しく、デザイナーの長岡綾子さんと書籍『OKAIKOSAN お蚕さんと過ごす1年間』をつくることにしました。この本では、メンバーとスタッフの言葉や写真、日誌や表現されたマンガ、イラストなども掲載。本をつくりながら、お蚕さんという小さな生命から紡がれる縁や学びをあらためて実感しました。みんなの興味や取り組みが、今後も広がっていきそうです。(森下静香)

9.25 (土)、11.12 (金)

2022. 1.8 (土)

レジデンス事業(木工との交流)／奈良

漆の郷・曾爾村で木工に取り組む



photo: Kiyoshi Nishiohara

福井県で活動するろくろ舎の木地師・酒井義夫さんをファシリテーターに迎え、木工について学び、試行するためのリサーチツアーと創作ワークショップを実施しました。奈良県内の材木に関わる仕事、さまざまな手法で木を生かし創作している作家や工房を訪問し、障害のある人との木工の可能性について意見交換。漆、三宝、木工ろくろ、浮造りといった伝統技法や、量販店では見ることが難しい国内外の多種多様な木材を見聞きし、漆の木の植樹を体験するなど、木や森の生態系や材木の生かし方を学びました。曾爾村で行ったワークショップでは、木材の余材に打刻してテクスチャーをつけ、切る・彫る・削るとは違った創作にもアプローチしました。(藤井克英)



photo: Haruhiko Okuyama

10.26(火)、12.28(火)

2022. 2.25(金)

レジデンス事業(竹工芸との交流)／京都

「竹」に触れて・感じて・考える

障害のある人たちと竹工芸を通して交流をするプログラム。会場となったのは、上質な竹の産地としても知られる京都府長岡京市で、80年にわたり茶道具から日用品に至るまで多彩な商品を製作し続けている高野竹工株式会社のショールーム。リサーチ&ワークショップでは、〈触れる・感じる・考える〉の3つのキーワードを軸に、高野竹工の職人とGood Job! センター香芝のメンバーや、京都の障害者福祉施設からの参加者とともに、竹林のなかに入ってみることからはじめました。そのほか、特性や特徴、竹林に生息するキノコや小さな生き物といった生態系にまつわるミニレクチャーの実施、さらには障害のある人との技術交流や商品製作を視野に入れたワークショップを行い、素材の可能性を探りました。(奥田奈々子)



photo: Tomoko Hayashi

11.27(土)

実例づくり

(CLAY WORKS | 平城京の土でつくる創作ワークショップ)／奈良

土と人の関係を学ぶ



photo: Naumi Kinugasa

常滑からデザイナーの高橋孝治さんを招き、平城宮跡歴史公園にて、平城京の土を使ったワークショップを行いました。昨年の常滑でのニュートラで、足下にある土で布を染めたり、紙を漉く実験をしていた取り組みが、ここ奈良で展開。高橋さんからは、地球誕生から土ができるまでをわかりやすく紙芝居で紹介いただきました。その後、参加者とともに土を砕き、水を加えて泥にしていって工程を体験。布は薄くグレーがかった色に染まり、紙はこの地で出土した人面土器を再現した形になりました。朱雀門をバックにした乾燥タイムを経て、ワークショップは終了。1,300年前にここで生活をしていた人たちが、この土をどう使っていたのか、想像を巡らせながら土と触れ合った一日となりました。(岡部太郎)



12.12(日)

実例づくり (CLAY WORKS | 京都・奈良の土壁めぐり)／京都

職人がつくった土壁巡り



photo: Naumi Kinugasa

地域の素材「土」を使ったものづくりを歩いて学ぶツアーの京都編。野良仕事の素朴さを感じた奈良編とは対照的に、職人が培った技術を目の当たりにしました。案内人は、左官の修行を経て京都を拠点に活動する建築家の森田一弥さん。建立700年近くを経た寺社から、つい近年改装されたという住宅までを巡りながら、土壁の種類やその技術が生まれた経緯を教えてくださいました。参加者から聞かれた、「自分の足下の土でできていると実感した」「茶室にも見られるような『民のつくったものを愛でる』喜びは、いま自分が携わっている仕事と変わらないことに気づき、心が沸き立っている」「壁＝分断の印象が変化し、やわらかい社会に通じる可能性を感じた」という感想が印象的でした。(那木萌美)



CLAY WORKS

土と人との関係を、ものづくりや地域の文化とともに学ぶプロジェクトとして、誰でも参加できる創作ワークショップや土壁を見に行くツアーなどを実施しました。



森田一弥(ツアー京都編案内人/森田一弥建築設計事務所)

「今回のツアーを通して、京都の文化財に使われているような繊細な土壁も、民家の荒々しい土壁も、どれも同じ土から生まれていることをお伝えできればと思いました。大徳寺の境内で、きれいな赤い土や浅葱色の土を発見したときのみなさんの興奮は、それを使って土壁を塗りたいと考えた先人の興奮を再現しているようにも感じました。時代を経ても変わらない、自然素材の魅力ですね」

12.16(木)

伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー／京都

京都・北山杉の里へ

床柱などで有名な北山杉の里、中川をはじめとする京都・北山地域を訪ねました。案内役は中川や北山地域の文化を保全し継承していく活動を行う一般社団法人北山舎代表の本間智希さん。森林が狭いという北山の自然背景から生まれてきたという台杉や、杉を育て枝をうち、伐採、皮を剥き、乾燥させる仕上げまでを産地で行うことも北山杉の特徴であることを教えていただきました。その後、本間さんや北山舎が管理する3つの建物を見学。驚いたのは、そのすべてが修繕の途中であり、多様な人が参加していることでした。大工さんや建築を学ぶ専門学校生、建築設計事務所やアーティストが直し、つくり続けていくことで、また新たな人がつながら、それぞれが北山での関わり方を見つけていく。そのこと自体が、北山の文化をつないでいくのだと実感したツアーになりました。(森下静香)



12.18(土)、19(日)

伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー／徳島

伝統工芸を訪ねる旅



建築家で「－みんなの複合文化市庭－うだつ上がる」も営まれている高橋利明さんに、2日間にわたり徳島県をご案内いただきました。伝統工芸品がつくれる現場や、地域と人・ものをつなぎ取り組みをしているゼロ・ウェイストセンターへ。行く先々で、伝統的な技術や先駆的な仕組みだけでなく、土地の歴史・技術を継承し、現在や未来にどうつなげるか試行錯誤するあり方や、いびつでも愛おしいものもつ魅力、地元の課題への取り組みを自分たちのブランディングにつなげる力、いま立っているその場から、ゆるやかにまわりとつながる関係の広がりなども学ぶことができました。(小松紀子)

2022.1.11(火)

実例づくり(ふくしとこけし)

こけしと福祉の可能性を探る

2021年の3月にGood Job!センター香芝(以下、GJ!センター)で、オリジナル商品の販売と商品についてのレクチャーをしていただいた、新型こけしや創生玩具などのプロダクトブランド・ドンタク玩具社の軸原ヨウスケさんを再びお招きしました。今回は、GJ!センターとドンタク玩具社、こけし工人さんとのコラボレーション商品の開発につなげるため、メンバーとスタッフに対し、こけしの基礎知識を教えてくださいました。制作風景の動画を見たり、地方によって異なるこけしのデザインについて学び、GJ!センターでこけしをつくるとしたら、どんなものにしたいかなど意見交換をしたり。最後は宮城県・鳴子の「こけし祭り」の映像も見せていただき、メンバーの間では「GJ!センターでつくったこけしも販売するぞ!」という目標ができました。軸原さんとこけし工人さん、GJ!メンバー三者の関わりにより、どんな新しいこけしが生まれるのか、いまから楽しみです。(安部剛)



1.15(土)、16(日)

伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー／山形

自然の恵みから生まれるものづくり

山形駅から車を走らせ、デザイナーの吉田勝信さんの工房へ赴きました。鹿肉や黒豆の味噌など、nokatachiの二戸勝也さんによる目にも美しくおいしい料理をいただいた後、かんじきを履いて雪山に入ります。そして、枝や葉っぱを採取すると、カーボン紙と一緒に工房のプレス機へ。枝の厚みによって、吉田さんが圧を細かく調整しながら印刷した厚紙は、オリジナルのノートに仕上がりました。翌日は新庄市へ。デザイナーの吉野敏充さんが運営に関わるおやさい cafe AOMUSHIの一角をお借りして、伊藤和江さんの手ほどきのもと、山葡萄の皮を使った箸止めづくりに挑戦しました。材料は、すべて伊藤さん自らが山に入って採ってきたものだといいます。後半は吉田さんや地元の福祉施設職員の方を交えて、意見交換の時間に。表現活動における悩みごとや今後の可能性について話し合いました。生まれた土地にもともとあるものの価値を見直し、現代に軽やかさや楽しさをもって伝えていくその姿勢から、学ぶことがたくさんありました。(中島香織)

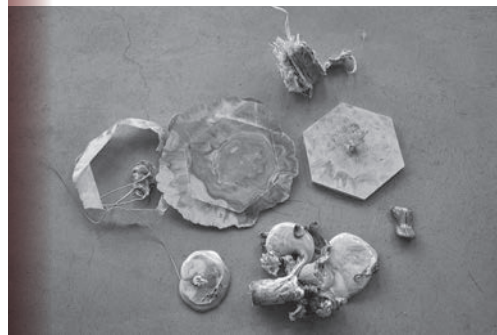


Photo: Harumi Miura

2.2(水)、2.24(木)

レジデンス事業(デジタル工作との交流)／奈良

プラスチック再活用の試み



3Dプリンタなどのデジタル工作技術と手仕事の分野を横断し、新しい表現や問題解決を目指す「新工芸舎」とともに、素材の再生やロングライフ化など、ものづくりにおける循環について考えるプログラムを実施しました。再成形により素材をアップサイクルしたもののづくりを試みるオランダ発の「プレシャスプラスチックプロジェクト」をもとに、3Dプリントで排出される端材や廃材となる樹脂の再活用に着目。樹脂を色味ごとに選別して細かく粉碎し、熱を加え加圧する射出成形機を用いて、人力で樹脂素材を押し出すプロセスを実践。金型成形のほか、さまざまな造形手段へのアプローチも検討し、素材循環の学びが体感的に得られました。(藤井克英)

3.6(日)、11(金)

ニュートラ談義online

3年間の活動から、これからのものづくりを語り合う

2019年からはじまったニュートラを振り返り、ものづくりの現在とこれからのあり方について対話するオンライントークを実施。3月6日は「福祉の現場を生かす、価値のあるものづくり」、11日は「『わたしのニュートラ』から、ものづくりを考える」をテーマに、ゲストを招き事例紹介や議論を展開しました。ニュートラの取り組みはほとんどコロナ禍に行われましたが、その結果、それぞれの地域内で、福祉やものづくりに携わる人同士が出会う機会が生まれました。今回のトークでは、各地で行われている取り組みのその後を聞いたり、伝統のものづくりと福祉をつなげる人たちと、それぞれの事例を共有し合ったりしました。福祉、デザイン、ビジネス



といったさまざまな立場の人たちが関わることで、お互いの意識が変わったり、ものづくりの周辺の価値に気づいたりする経験が多くあったと思います。常滑の高橋孝治さんがおっしゃっていた「ニュートラは人なり」を、まさに実感するような時間を過ごしました。(岡部太郎)

伝統工芸と福祉を 考えるものづくりスタディツアー

さまざまな伝統工芸の産地をまわり、伝統工芸を新たな視点で発信している職人やコーディネーターらとの交流を通して、福祉の現場にも生かしていけるようなアイデアに触れるスタディツアーを実施しました。



武田和恵(やまがたアートサポートセンターら・ら・ら)

「クリエイターとの出会いに加え、参加者同士が同じ体験を通して場を共有し対話することで、講演会やオンラインセミナーでは感じられない、地域や立場の違う人たちが混ざり合う経験に。各々が身近なものに目を向けて魅力を見つけ、既存の価値にとらわれず、堂々と丁寧に伝えていく仕組みをつくっていることに可能性を感じました。福祉の現場の悩みを共有しながら、ケアをクリエイティブにひらいていくアート、ものづくりの次のヴィジョンが具体的に見えたと思います」

京都編 「北山杉の里から、ものづくりを考える」
ツアー先：京都府京都市北区中川北山町エリア
案内人：本間智希(北山舎)
日程：2021年12月16日(木)

徳島編 「徳島の伝統工芸と福祉の可能性を探る旅」
ツアー先：富永ジョイナー(木工)、上勝町ゼロ・ウェイストセンター(コミュニティセンター)、カフェ・ポールスター、アワガミファクトリー／阿波和紙伝統産業会館、WEEKEND TAKAHASHI STORE、武知家住宅(藍染)、Saa dye studio(藍染)
案内人：高橋利明(建築家／WEEKEND TAKAHASHI STORE)
日程：2021年12月18日(土)、19日(日)

山形編 「山形の伝統工芸と福祉の可能性を探る旅」
ツアー先：吉勝製作所、新庄市エコロジーガーデン『原蚕の杜』、おやさい cafe AOMUSHI
案内人：武田和恵(ギャラリーら・ら・ら／しおむすびおかわり)
日程：2022年1月15日(土)、16日(日)

※本ツアーは、日本財団「障害のある人の表現と伝統工芸の発展と仕事づくり」の助成を受けて実施しました

ぶさいやろ。でも、これが愛おしい。

— 富永啓司 (富永ジョイナー・4代目阿波指物師)

精緻な指物の仕事を存分に紹介いただき、“木と対話をしながら仕上げる”といった話を聞いた後、富永さんが懐から取り出したのは、まだ小さいお孫さんが紙と鉛筆でつくった「道具入れ」。「ぶさい」は「ぶさいく」の意味。愛おしい、なんだか心が動く。それが一番大事。ものづくりの原点を話していた。(2021年12月 伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー 徳島編にて)

はじめて竹のことを学んだり、近くで見たりして、こんなふうに見えるんだとわかりました。

— 金子菜未 (Good Job! センター 香芝メンバー)

竹林に入り、地下茎で竹がつながっていることや、不思議な節を持つ貴重な竹があることなど、風景のなかで見過ごす生態について実感した。日々素材を丁寧に育て、加工しながらものづくりにつなげる人たちがいることを、つくり手がいる場所に行っただけで知ることができた一日となった。(2021年10月 レジデンス事業「竹工芸との交流」ワークショップにて)

竹を使って何かをつくるという行為自体と、完成した「そのもの」が、その人の「表現」なんだと感じました。

— 小林正樹 (バスハウススタッフ)

京都・長岡京の高野竹工との竹工芸ワークショップに参加した、地元の福祉施設のスタッフ・小林さんの言葉。利用者が真剣なまなざしで、集中して取り組む姿に日頃から寄り添う小林さんには、それが本人の表現として映ったようだ。それぞれが自分のイメージをもとに道具を使い、楽しそうに作品について語る姿が印象的だったという。(2021年10月 レジデンス事業「竹工芸との交流」ワークショップにて)

ものだけを売るっていうのはいかなものか。

— 吉野敏充 (デザイナー)

一時は東京を拠点に、デザイナーとしてたくさんものを世に出してきた吉野さん。「ものをつくって売っても消費されたらそこで終わり」と考え、思いついたことが地元山形での「体験」の提供だった。たとえば古代布のタッセルづくり、納豆汁づくりのワークショップなど。最近ではオンラインでのワークショップも増え、土地に根づいた手仕事の体験がより多くの人に共有されている。(2022年1月 伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー 山形編にて)

近所の高校生にこそ来てほしい。

— 高橋利明 (- みんなの複合文化市庭- うだつ上がる)

地域の優れたもの、美しいものを誰に届けたいか。地元や全国のプロダクト、古本、古着、家具が集まる「うだつ上がる」を運営する高橋さんは、目利きや遠くからの来客だけでなく、近所の若い人たちにこそ届けたいと言う。小さい頃からいいものに触れる。それが、これからの地域でのものづくりを豊かにする。まちづくりではなく、人とのものの接点として機能する場所。将来的に高校生までの若者たちには、ギャラリーやキッチンを無料で貸し出したいと考えているらしい。「うだつ上がるは高校生を応援する」とFacebookで呟いていた。(2021年12月 伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー 徳島編にて)

ものづくりに関わる多様な人たちとの議論を通して出てきた言葉の数々。

土の色を見ろという

新しい楽しみができた。

— CLAY WORKS「京都・奈良の土壁めぐり」京都編参加者の言葉

京都のツアー参加者の言葉。大徳寺の土壁のすぐ近くの地面に、同じような色の土を発見し、まさにここにあった土を使って壁をつくったのではないかと推察。土を見る目が変わるとその地域や環境を見る目が変わるということを実感した。(2021年12月 CLAY WORKS「京都・奈良の土壁めぐり」京都編にて)

食材の交流もあるべきなんじゃないか。

— 二戸勝也 (nokatachi)

山形でサトウキビを露地栽培する人と出会い、考えたこと。二戸さんは、フィールドワークや料理を通して「食べる」ことを分解し、見直している。地産地消は地域内での結びつきを強くする。でも、時々違う土地にルーツのある食材を料理に取り入れてみると、なんとも楽しい。食材を素材に置き換えると、ニュートラのものづくりにもつながるひと言だった。(2022年1月 伝統工芸と福祉を考えるものづくりスタディツアー 山形編にて)

製品にも人と同じように一生があると思うんです。

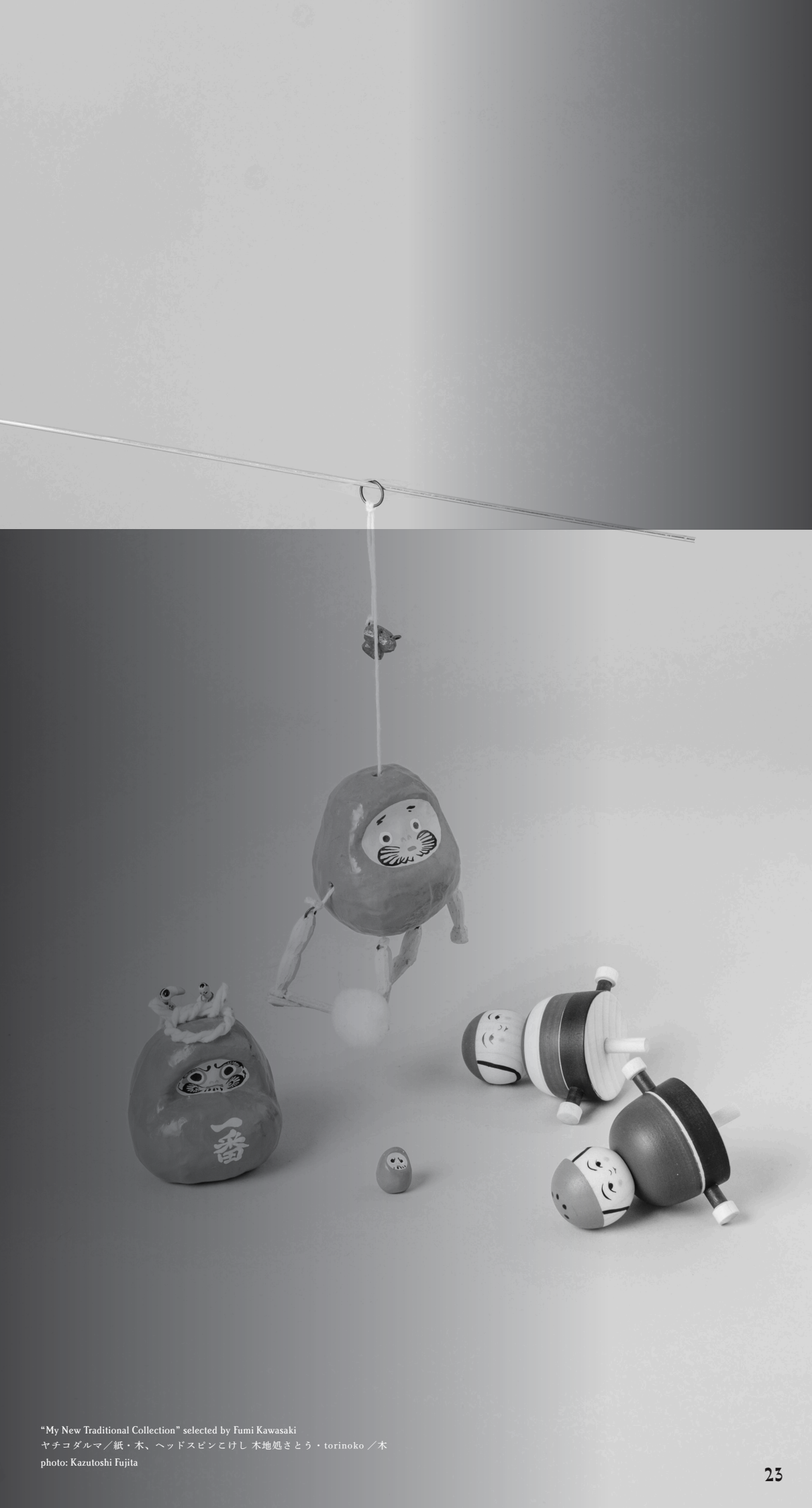
— 津田和俊 (京都工芸繊維大学デザイン・建築学系講師)

パイオ・リサーチの視点から、ものの循環や再生を研究する津田さんの言葉。ものを買って、使って、捨てるというだけではなく、つくるところから関わることでも、もの寿命、ライフサイクル全体を考えることができる。ものを育てているというライフサイクル思考のあり方を、子どもや地域の人たちと考える視点が印象的だった。(2021年10月 第1回「ニュートラゼミ」にて)

「作品」と「プロダクト」の間を担うものとして「こけし」は優れたフォーマットになるのではないかと思っている。

— 軸原ヨウスケ (ドンタク玩具社)

福祉の現場で生まれる作品とプロダクトの間、美術とデザインの間のものづくりに、手仕事や工芸の可能性が潜んでいないだろうか。誰もが表現者になり得るプロダクトができればどんなにいいだろう。シンプルならくろでつくられた造形、その上に描かれる(型はあるものの)即興的な描彩、筆自体が生み出す簡易だが無駄のないミニマルな模様、表情。これらをうまく混ぜ合わせてワークショップを繰り返しながら「ふくしとこけし」をはじめてみたい。長年全国各地のこけしに向き合ってきた軸原さんから、そんな熱いメッセージが届いた。(2022年1月 軸原さんによる「ふくしとこけし」プロジェクトの企画書より)



“My New Traditional Collection” selected by Fumi Kawasaki
ヤチコダルマ／紙・木、ヘッドスピシンこけし 本地処きとう・torinoko ／木
photo: Kazutoshi Fujita

暮らしのなかで人がつながる
「呼吸」グラス

文・李萬鏗

(サンドウィッチスタジオ
「三明治工」共同設立者)

筋萎縮性側索硬化症(ALS)患者は、病気の進行にもなつて、少しずつ身体能力を失い、やがて自分で呼吸する能力をも失っていく。「呼吸」グラスは、私たちサンドウィッチスタジオと台湾ALS協会が共同で開発した、生活のなかで社会的なつながりをつくるためのものだ。

常に楽しさのある未知の可能性を模索しているが、このグラスも「一緒に遊ぶ」というコンセプトから生まれた。患者、製作者、ユーザーがともに参加できるものとはなんだろう？ それを可能にする方法は？ そんな問いがプロジェクトの出発点となり、呼吸というアイデアを思いついた。このグラスによって、患者は他者による解釈や通訳なしで、自身のことを詳しく説明でき、すべての人々の参加が意味深くなる。



コップをつくり、ユーザーが使用するまでのプロセスこそが、ALS患者の物語とともに「呼吸」グラスの意義となる

私たちはガラスシートを装着したカメラを通して、患者の呼吸がなす水蒸気の輪郭を記録。それをグラスに閉じ込めた。患者、製作者、ユーザーの呼吸は、飲み物を飲むというシンプルで必要不可欠な行為によって、いわば旅をする。流動的な高温状態からガラスは徐々に冷えて固化し、運動エネルギーを失う。それは

患者の体が次第に動かなくなる状態によく似ているが、呼吸グラスは人々の関係を再び詩的な方法で動かしていく。公共福祉や社会参加を再考することは、障害と社会問題をケアする発起点になる。日々の暮らしのなかに溶け込む思いがけないアイデアで、すべての人に新しい社会的関係をもたらしたい。

リ・まはん
1983年に台北国立芸術大学・香港芸術学院芸術的芸術研究科を卒業後、Sandwich Studioを設立。クリエイションとのコラボレーションを通して、人生における目に見える／見えないあらゆる人々の状態や障害を探索。

要る／要らないの価値から、
はみ出ていくものたち

文・奥村奈央子

(NAOKO /
TOKYO SOCIAL DESIGN)

「やつぱり捨てられない」
シミ、だらけでも手放せない、色あせた布や古い紙。あの柄にこの絵を載せたら、シミまでかつこよく見えてくるのではないだろうか……？

何にもならないもののなかに、なぜか捨てられない。私の棚には、ごちゃごちゃとゴミのようなものがあふれている。ミニマリストや効率性、整理整頓という響きに憧れはするものの、気づけば本稿を書く間にも、車につぶされてまっ平になった空き缶の美しさに魅せられ、つい拾ってしまった。

そんな、人によっては要らないゴミのような、何にもならないけれど存在自体が愛おしい、面白いものたち。要る、要らない？ 役に立たない？ 見方を変えれば役に立つ？

使える／使えない、役に立つ／立たないという利用価値が基準になるのではなく、存在そのものに価値を見出し、背景にある概念や気づきを伝えていきたい。そんな想いで、古道具やら、イタリアのラポルトリオ・ザンゼーラ、福祉施設や刑務所のプロダクト、ソーシヤルフアームの野菜などを幅広く紹介して



道で拾ったという、つぶれてまっ平になった空き缶。「立体時とは違った美しさがある」と奥村は語る

いる。また、慌ただしい世の中だからこそひと呼吸できる時間が大切だと考え、「スーパード」よりも「スーハー(適当)」くらいがちょうどいいと「KIOSKスーハーマーケット」も営業中だ。

おくむら・なおこ
デザインと福祉のフィールドを中心に、社会の課題を創造的に解決するクリエイティブチームを運営。質の高いプロダクトの制作を通して社会と関わり、クリエイティブの可能性を創造しながら、社会のあるべき姿を提示していくことを目指す。ラポルトリオ・ザンゼーラのアジア圏におけるパートナー。

ニュートラ 掲示板



ニュートラのWebサイトでは、限定コラムも充実。メニューをクリックすると聞こえる音声もお楽しみください。



事例づくりのプロセスや背景、各企画のレポートやイベントのお知らせなど、さまざまな記事をnoteで発信中です。



プロジェクトの膨大な記録からセレクトした写真を、Instagram(@newtraditional_gjp)にて発信。ぜひチェックしてください。

NEW TRADITIONAL PAPER 2021-2022

発行:2022年3月31日 | 発行元:一般財団法人たんぽぽの家 〒630-8044 奈良県奈良市六条西3-25-4 Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 Mail nt@popo.or.jp | 企画制作・プロジェクトメンバー:たんぽぽの家(岡部太郎・後安美紀・中島音織・藤井克英・森下静香・那木萌美・奥田奈々子) 編集ディレクション&編集:MUESUM(多田智美・永江大・鈴木瑞理子) アートディレクション&デザイン:UMA/design farm(原田祐馬・西野亮介) 展示記録撮影:藤田和俊 発行・運営:一般財団法人たんぽぽの家 | アドバイザリーボード:加藤駿介(NOTA&design 代表) 白水高広(株式会社うなぎの寝床 代表) 水野大二郎(京都工芸繊維大学 KYOTO Design Lab 特任教授) 守屋里依(ippo-plus) 永田由郷(合同会社てで協働組合 共同代表) スーパーバイザー:播磨靖夫(一般財団法人たんぽぽの家 理事長) 多田智美(MUESUM代表/編集者) 原田祐馬(UMA/design farm代表/デザイナー)

[表紙写真] "My New Traditional Collection" selected by Fumi Kawasaki 動物 おりもんや(鳥取県米子市) / 綿 photo: Kazutoshi Fujita

本誌は、令和3年度文化庁委託事業「障害者等による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)」の一環で制作されました。